

〔奇魂一〕醫藥名義

醫の僧の姿と成しは、同書○和氣氏系圖に、長成、從四位上、典藥助、承久三年出家、法名舜佛、翌日仙院爲御

供參隱岐、後歸京、と有ぞ初也ける、こは皇帝の故有て幸ます時なれば、形をかへつゝも仕奉しは、

忠實なる士の所爲にて異なるを、謾に僧形と成はいかにぞや、こは鎌倉の武家杯にて、戰場に使

ふに事無らしめんが料に然なしけむが、其風自ら京の官醫にも移けむ、同書に、明重云々、始准武

家醫爲法師體、法名宗鑑、と有ぞ實に始也けらし、其原は古僧輩に呪禁は更也、藥方もて人を療る

ことを許されて、法蓮醫に精しとて、其親族に宇佐君姓を賜り、空海も表を奉て、太素、本草、病原杯

を論て、人患を除んと奏し、杯史に有類にて、亂世の比は、まして打任たる業の如成けるを、醫も

又僧の姿となれる習なるからに、醫と僧と混しき事もありけん、然れども古は醫官正ければ、僧

と紛しからざりしかど、猶僧は不祥サマナカりきとみえて、續紀養老元年に、詔曰云々、僧尼依佛道以持神呪救

病徒、施湯藥而療痼病、於令聽之、方今尼僧、輒向病人之家、詐騰幻恠之情、戾執巫術、逆占吉凶、恐脅耄

穉、稍致有求、道俗無別、終生姦亂云々と有、此弊今は殊に甚し、

〔百草露十六〕京都將軍の醫師をば上池院といふ、年中恒例記に見えたり、はや其頃は剃髮したる

と見えたり、

〔年中恒例記〕正月一日

御對面次第 御對面所へ御出座之時、御供衆、御部屋衆、申次衆懸御目也、然ば近年は御用心に付

て詰衆在之、出仕之時は申次之次に懸御目也、上池院以下節朔之醫者也、

〔本朝醫考中〕和氣氏

明重 尙成子也、略中 後剃髮號宗鑑、略中 宗鑑不歷僧綱被聽著直禊白袴、倭法官僧聽著之、不蓋和

氏之剃髮始于宗鑑、